保育実践研究としてのエスノグラフィーにおける「フィールド」とは何か
― 遊びの展開と保育者の関与の不可分性 ―

岩　田　遵　子

What is the "Field" in the Ethnography of Childcare ?
An Inseparable Relationship Between the Process of the Children's Play and the Teacher's Behavior

Junko Iwata

要約：
保育実践における子どもの遊びをエスノグラフィーの手法によって研究する場合、ある特定の遊びのみを観察対象として記録を取り、そこから遊び一般の特性を論じるといった、遊びを自己完結的なものとみなす研究手法は問題がある。なぜなら、保育における子どもの遊びは、一見、自己完結的に見える場合でも、同じ時空間における保育者の動きと関連しているからである。本稿では、そのことを4歳児のベイブレードごっこの遊びの事例を通して示し、保育実践における子どもの遊びをエスノグラフィー研究の対象とする場合、フィールドデータには、ある特定の遊びの展開のみでなく、保育者の動きも含める必要があることを論じる。

キーワード：
保育実践研究、遊び、エスノグラフィー、フィールド、保育者

Ⅰ はじめに

保育実践における子どもの遊びをエスノグラフィーの手法によって研究する場合、ある特定の時空間に展開された子どもの遊び場面における子ども同士の発話や行為のみをフィールドデータとしてエスノグラフィーを記述し、そこから遊びにおける子どもの発話や行為の意味やふるまいのルールを、子どもの遊び一般の特性として論じようとする研究は少なくない。

しかし、保育実践におけるある特定の時空間における子どもの遊びを、ストリートプレイのように子どもたちのみによる自己完結的なものとみなすこのような研究には、主に次の二つの問題がある。

第一に、保育実践中に展開される子どもの遊びは、保育者のふるまい（直接的・間接的関与）やその集積、また同一空間における他の遊び状況と無関係には成立しえないにも関わらず、これらの研究は、そのことを捨象しているということである。例えば、子どもたちが遊びに集中し、その遊びが一定の場所で一定の時間展開されている場合は、保育者がその遊びにたびたびまなざしを送っており、遊びメンバーである子どもたちがそれを認知していると思われる場合が多い（小川2009）。鷲田清一が言うように、保育者に見守られていることを認知することが、子どもが保育者から離れて遊びに集中することを可能にするからで

ある（鷲田 1996）。それゆえ、それとは逆に、保育者が一つの遊びだけに関与したり、室内を動き回ったりしてしまう場合、保育室内の子どもたちも動き回って落ち着かず、結果的に観察対象となる遊びも不安定で持続しない可能性が高くなる。また、たとえ保育者が動き回らなくても、観察対象の遊び以外の遊びが充実しておらず、室内を動き回る子どもが多ければ、観察の対象とする遊びメンバーも遊びに集中していないことが多く、それとは逆に、室内の各コーナーの遊びが、それぞれ充実しており、メンバーがモノとの関わりやメンバーとのやりとりに集中しているときは（製作コーナーで粘土をこねている、ままごとごっこで料理をしている、など）、対象となる遊びも充実することは少なくない。さらに、外見上は、ある特定の短時間の中では保育者の関与無しに子どもたちが活動していると見える場合でも、その姿は長い期間における保育者の関与の結果である場合も少なくない。

第二に、遊びの展開はその遊びの歴史性（子どもと子ども、子どもとモノの関わり合いの集積）に規定されるにもかかわらず、それを捨象してしまっていることである。例えば、同じモノを持つことが遊び仲間であることと関係があるのは、そのモノがメンバー相互の関わり合いの中で、ある意味を担っているからであり、そのモノを介したコミュニケーションの集積を抜きに、モノと仲間関係との関連性を論じることはできない。ある遊び場面においてモノの所有が仲間であることの象徴となるのは、モノそれ自体によるのではなく、モノと子どもとの関係の歴史性によってである。

以上のように、保育におけるある特定の時空間における遊びが、保育者の直接的、間接的関与及び、その関与の下に展開されてきた他の遊び、またその遊びの歴史性と無関係ではないとすれば、保育実践における遊びのエスノグラフィーには、これらの情報をも含める必要がある。保育における遊びを研究の対象とするには、遊びを完結したものと想定するのではなく、保育実践という文脈の中でとらえる必要があり、保育実践そのものを「フィールド」とする必要があるのである。その意味では、保育における遊びのエスノグラフィーを、「保育実践のフィールド心理学」（無藤・倉持 2009）のように、現実のよりよい方向への変革することを目的とする実践的研究と、法則定立をめざす研究とを安易に分けてしまうことには問題がある。

本稿では、以上のことを、保育における具体的な遊び場面（ブロック遊び）を例に、その遊びが他の遊びや保育者からは自立しているように見えるとしても、他の遊びと響き合い、保育者の動きに依存している側面が少なくないことを示したい。同じ時空間で展開される他の遊びとの関連性、およびそれらの遊びを含めた歴史性については、別の機会に論じたい。それによって、保育実践というフィールドは、その場で生起している現象や行為がたとえ自立的であるように見えるとしても、保育者の動きや場の記憶（歴史性）と重層的に関わっていること、それゆえ保育実践をフィールドとするエスノグラフィーの場合、ある特定の遊び場面を切り取り、その情報のみから遊びの中の一定の法則を導きだすことは困難なのであり、保育者の関与や保育者と子どもとの関わり合い、および両者と場の関わり合いの集積をフィールドデータとする必要があることを論じたい。

Ⅱ 外見上は自己完結的に見える遊び場面の事例

次に示すのは、4歳児がブロックで「ベイブレード」（一見すると扇風機の羽根のように見える。以下 BB）を作り、それぞれの BB を回したり、ぶつけ合って遊ぶ場面の事例である（以下この遊びを「BB ごっこ」と記す）。この遊びは一見したところでは、他の遊び

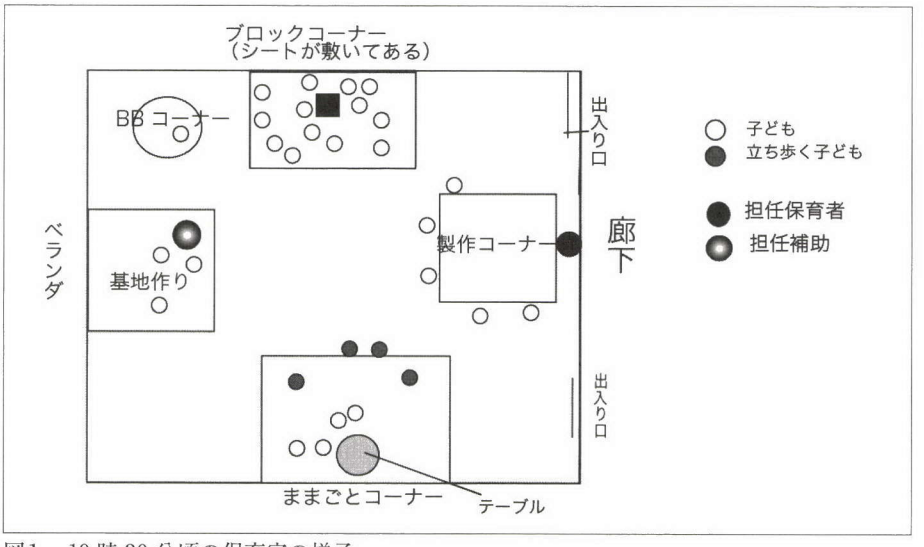


図1　10 時 30 分頃の保育室の様子

からも担任保育者 T の動きからも自立的に展開しているかのように見える。しかし、T の動きを含めて遊びを見ると、T の動きや他の遊びの影響が大きいことを明らかにしよう。BB ごっこのみを切り取って記した事例を「部分事例」、T の動きを含めて記した事例を「事例」として記すことにする。

【部分事例：
自立的に展開しているように見える BB ごっこ】

4歳児クラス、2月中旬。この日は朝、雪が降ったので、子どもたちは登園後すぐに雪の残っていた近くの畑で雪遊びを1時間ほどして保育室に戻り、10時25分頃から自由遊びが始まった(いつもは、登園後すぐに自由遊びが始まる)。10 時 30 分頃には、図1のように5つのコーナー（製作、ままごと、基地作り、ブロック、BB ごっこ）に子どもたちが別れて遊んでいた。担任 T は製作コーナー（壁を背にして座る）、担任補助1名は基地作りに入り、終始その遊びに入っていた。このようなコーナーの設定は、基地ごっこ（一昨日まで製作コーナーにいた Z 男が「基地を作る」と言って前日から作り始めた）を除いては、事例当日までの数日間、ずっと同じである。

a：ブロックコーナーに多くの子どもが群がりブロックを箱から出す（10：27 ～）

ブロックコーナーのブロックの入っている箱（以下「箱」）に子どもたち 14 人（男子 11 人、女子 3 人）が群がり、ブロックの箱から銘々ブロックを出し、それぞれ座ってブロックを組み立てる。G 男は、自分の使うブロックを箱から出すとすぐに BB コーナーに行く (1)（図2参照）

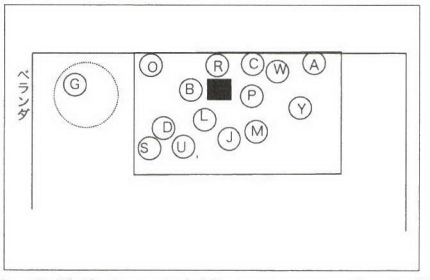


図 2　G 男がブロックを持って BB コーナーに行く

b：G 男と W 男で BB ごっこが始まる（10:33 ～）

まもなくすると、W 男もできかけの BB を持って

G男のいるBBコーナーに行き、2人で一緒に組み立て、でき上がるとそのBBを銘々回す(2)。回してみては、ブロックコーナーに戻って新たにブロックを足してBBを組み立て直し(ベランダ側:図3参照)、また回してみる、ということを繰り返している(3)。回すこと自体が連続することはない。

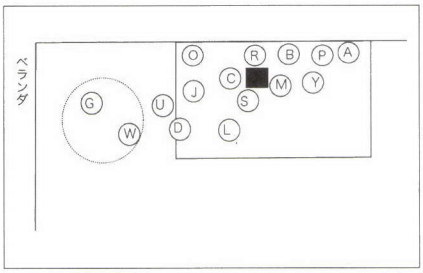


図3　G男とW男が組み立てたBBを回し始める

こうして2人ともBBを回しながら、頻繁にブロックコーナーとBBコーナーを行き来してBBを補強・改良し、ブロックコーナーでは、そこで作っているM男たちと喋ったりしている(4)。

c：人数が次第に増え、かけ声を唱和したりして盛り上がる(10：54頃〜)

イ）J男とM男が加わる(10：54〜10:55)

W男とG男は自分のBBをBBコーナーで回すが、BBを補強したり改造したりするために、それぞれブロックコーナーに行ってブロックを探して自分のBBを改造し、またBBコーナーに戻ってくる(5)。その間、J男がBBコーナーに回しに来て(6)、その後、R男が回しにくるが、R男はすぐにいなくなる。そこにG男がブロックコーナーから戻ってきてJ男とBBをそれぞれ回し始める(7)。M男がBBを持ってやって来て(図4)、自分のBBを回し、J男の顔を見ながら「スリー、ツー、ワン、、」とかけ声をかけてBBを回す構えをする。「ゴ〜〜〜シュッ!」というかけ声にあわせて、M男とJ男が一緒にBBを回す(8)。

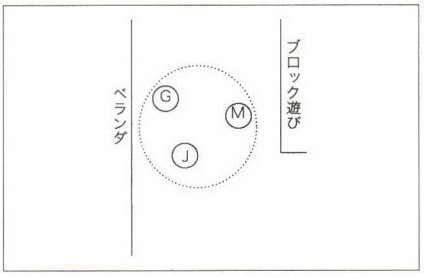


図4　J男、G男、M男の3人でかけ声をかけてBBを回してぶつける

2人のBBが回りながらすぐにぶつかって倒れると、「はは(笑)、同点だあ。もう一回」と言ってすぐに「スリー、ツー、、、」とかけ声をかける。今度はそのかけ声にJ男が唱和して、「シュッ」というかけ声で一緒に回す(G男は後ろを向いて自分のBBを補強し始める(9)。以後、ときどき振り向いて、BBの回る様子を見ていたり、W男とBBを回してぶつけ合ったりする)。

ロ）D男が加わり、W男が戻ってくる(10：55〜10：59)

そこに、D男がM男たちのBBを興味深そうに見ながら自分で作った車を持ってきて腰を下ろし(図5)、BBが回るのを見ている(10)。M男とJ男が再度かけ声をかけながら回していると、BBの回り具合を別の場所で確かめていたW男が戻ってきて腰を下ろし「スリー、ツー、、」とかけ声をかけて自分のBBを回す(図6)(11)。M男とW男がそれぞれ回していると、D男(車を持っていてBBは持っていない)が「スリー、ツー、、、」と車で拍子を取るように言い始める(12)。それにあわせてJ男とM男とW男が回す構えをして、「シュッ」というかけ声のところで3人が一斉に回す。こうしてしばらくの間、誰かがかけ声をかけるとそれにもう1、2人が同調して一斉に回したり、銘々勝手に回したりしている(13)。M男はブロックコーナーに行き、BBを補強するブロックを持ってくる際に、

先ほどまで自分で作っていた車を持って来て、自分のBBに「どーん」と言ってぶつける(14)。

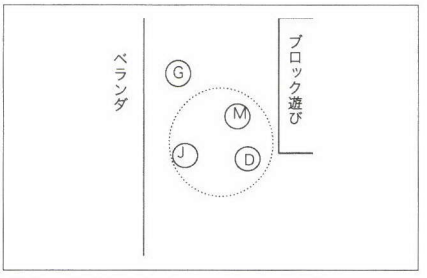


図5　D男がBBコーナーに来る

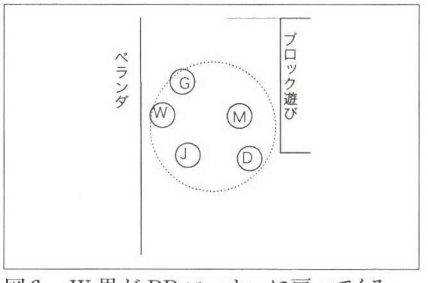


図6　W男がBBコーナーに戻ってくる

この間D男はブロックコーナーに行って自分でBBを作り(15)、BBを持って(車も左手に持ったまま)戻ってきて、今度は、回す行為も参加する(16)。そのうちに、誰かがかけ声をかけると他のメンバーが唱和し、それに合わせてBBを回し、それが終わるとすぐにまた誰かがかけ声をかける、というように、立て続けに「かけ声の唱和―BBを回してぶつける―かけ声の唱和―BBを回してぶつける、、」という活動がしばらく続き、その場が盛り上がる(17)。

ハ) C男、L男が加わる(10:59～11:01)

「かけ声の唱和―BBを回してぶつけ合う」という活動が一段落したとき、ずっとブロックコーナーでBBを作っていたC男が来て「入れて」と言って腰を下ろす(18)(D男が「いいよ」と言うが、C男は返事を待たずに当然のように座る)。M男が何かに対して「～～～しないでよ～」と口を尖らせて不満げに怒ると、メンバーたちのBBを回す手が止まり、少し場に緊張感が走る。そこにL男が来て、その雰囲気には関係なく、「入れて」と言うが、誰も返事をしない。しかし、L男は入れてもらうのが当然のように座り(19)、M男も自分のBBを回し始める。すると、L男も他の子どもたちも自分のBBを回したり、作り直したりし始める(20)。

ニ) かけ声に合わせて数人が一緒に回したり、銘々で回したりしているうちに、「かけ声―BBを回してぶつける」が間髪を入れずに続き、場が盛り上がる(11:01～11:03)

C男が「スリー、ツー、ワン、、」とかけ声を発すると、W男がそれにあわせて構え、W男とM男も「シュッ」で一緒に回す(21)。BB同士がぶつかってM男のBBが倒れ、M男は「あ～負けた!」と言い、自分のBBをひとりでかけ声をかけて回す。W男たちも銘々勝手に自分のBBを回す。M男が再びかけ声を発し始めると、それに今度はW男がのり、かけ声にあわせて構え、回す(他のメンバーは、自分のBBを直している)(22)。続いてD男がかけ声を発すると、M男がそれに唱和して構え、一緒に回す(23)。するとそれまで後ろを向いて自分のBBの補強をしていたG男が輪に加わり、かけ声を発すると、M男とG男がそれにあわせて構え、一斉に回す(24)。その後、7人が円座になって銘々勝手にBBを回したり、誰かがかけ声を発すると数人がそれにあわせて構え、一斉に回すことがしばらく続く(25)(図7)。(なお、それまでずっと製作コーナーに座っていたTは、この頃、ブロックコーナーのブロックコーナーに上がり、P子の横に腰を下ろし、ブロックで何かを無心に作り始める。視線は作っているブロックにあり、ときどきP子と言葉を交わしているが、そこから動いたり、誰かに声をかけたりすることはない)

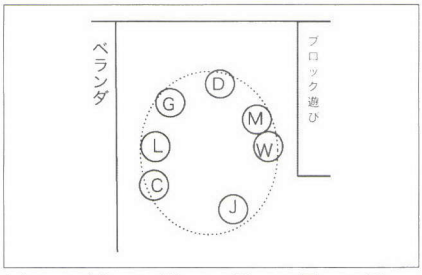


図7　C男、W男、M男、D男、G男、L男、J男の7人でかけ声をかけて遊ぶ

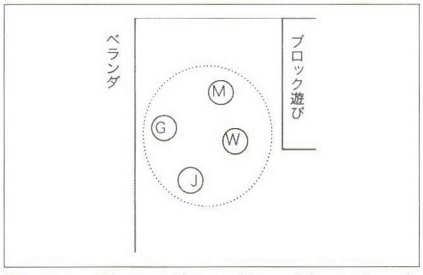


図8　M男、W男、G男、J男の4人になる

その後、先ほどと同様に、かけ声（主にM男）の唱和で回した後、間髪を入れずにすぐにかけ声がかかり、また回す、という「かけ声の唱和―BBを回してぶつける」ことが繰り返され、盛り上がる（26）。

d：BBメンバーもその場を離れて動き回るようになり、人数が減る（11：03～）

「かけ声の唱和―BBを回してぶつける」遊びがしばらく続き一段落すると、C男が立ち上がり、続いてJ男も立ち上がってBBを補強しにブロックコーナーに行く（27）。すると、D男も立ち上がってうろうろと歩き、その後座るが、座ったままブロックコーナーの方に移動する(28)。BBコーナーの場が少し落ち着かない感じになる。さきほどから動き回っていたO男が機関銃を持ってW男とG男のBBを「バーン、バーン」と撃ちに来るが、W男もG男もそれには全く取り合わない（29）。L男もブロックコーナーにBBの補強に行った（30）ので、BBコーナーは、M男、W男、G男、戻ってきたJ男の4人になり、M男のかけ声（「スリー、ツー、ワン、」）に合わせてBBを回す（図8）（31）。W男がブロックコーナーに羽の補強に行き（32）、入れ違いにL男が戻ってきて、4人（M男、G男、J男、L男）でかけ声をかけて回したり、それぞれが回したりする。

しかし、すぐに、J男が席を立ってブロックコーナーに行った（33）（ブロックコーナーのD男、U男とおしゃべりを始める）ので、BBコーナーはG男、M男、L男のになる（図9）。3人はしばらくの間、それぞれ自分のBBを回したり、いじくり回したりしていたが、そのうちにまたM男がかけ声（「スリー、ツー、ワン、、」）をかけ始め、3人でそれに合わせてBBを回し始める遊びになる（34）。

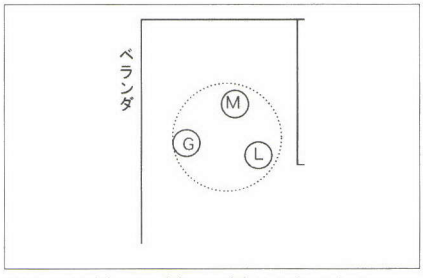


図9　G男、M男、L男の3人になる

M男とG男は一緒にかけ声に合わせて回し（35）、L男は座ったまま自分のBBを補強していたが、M男が、Tの所に言って「（遊べるのは）何分まで？」と聞きに行き、Tが組み立てたブロックをばらしながら「そろそろ終わり」と言う(36)と、M男が近くの子に「そろそろ終わりだって」と言う。L男とG男がBBを片付けに来て、ブロックコーナーのシートの上でブロックを組み立てていたP子やC男らと一緒に、コーナーを片付け、シートを片付ける。

以上に示したBBごっこの遊びの展開は、一見すると自己完結的であり、保育者の関与や他の遊びといったこの遊び以外の状況とは関係がないかのように見える。最初は皆がブロックコーナーのシート上で群がり、近くの子と喋りながらブロックを組み立てている（場面a）が、次第にG男やW男たちがシートの外でBBを回し始め（場面b下線（2））、次第に盛り上がり、人数も増え（場面c）、一番多いときは7人になる（場面c―ハ）が、一段落すると、BBを補強･改造するためにブロックコーナーに行く子が多くなり、そのまま戻ってこない子（C男）も出てきて、メンバー数が次第に減少し、最後（場面d）には3人（M男、G男、L男）になる。このような遊びの展開過程において、保育者はBBごっこに直接関与することは一切無い（そもそも、BBごっこにTは登場していない。Tが部分事例に登場するのは、片付けの場面のみである。：下線36）。また、他の遊びのメンバーがBBの所にやってきて、遊びに介入したり、遊びメンバーを誘ってコーナーから連れ出したりすることも、ほとんどない。O男が作った銃を持ってW男たちのBBを「撃つ」ことがあるが、W男たちは全く取り合わず無視しており（下線（29））、O男の行為が遊びの進行に影響を与えているとは思われない。

しかしながら、このBBごっこは、保育者や他の遊びメンバーの介入がないからといって、保育者や他の遊び状況からは全く自立的に展開しているのかと言えば、決してそうではない。保育者のふるまいや他の遊びと密接に関連しているのである。次にそのことを説明しよう。

Ⅲ 遊びと担任保育者との関連性

部分事例として示したBBごっこの遊びの展開は、少なくとも次の3つの状況と密接に関連している。その3つとは、保育者Tの動き、同じ時間における室内の他の遊び（特にブロックコーナー）、遊びの歴史性、である。ここではまず、Tの動きと隣のブロックコーナーの遊びとの関連を具体的に論じたい（同時空間に展開するその他の遊びと遊びの歴史性については、別の機会に譲る）。そこで、部分事例の各場面における担任保育者Tの動きとブロックコーナーの状況を記した場面を「事例」として表1（24頁～27頁）に示した。

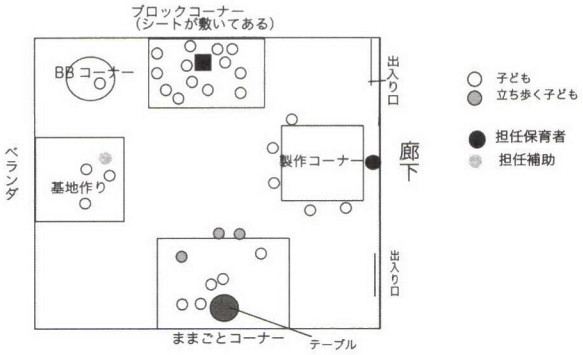
表1の事例を見ても、Tは、一見BBごっことは全く無関係に見える。Tは、遊び開始から30分ほどは製作コーナーにいて何かを作っており、その後BBごっこの隣のブロックコーナーに関与する。けれども、BBごっこに直接関与することは一度も無く、遊びの近くに行くことすらない。また、ブロックコーナーに関与すると言っても、その多くの時間は一所に座って動かずに何かをひたすら作っており、たまに隣のP子と作りながら喋っている（視線はブロックにあり、ひたすら作っている：下線ケ）だけで、ブロックで機関銃や車を作っているS男やB男に何か話しかけたり積極的に働きかけたりしているわけでは全くない。

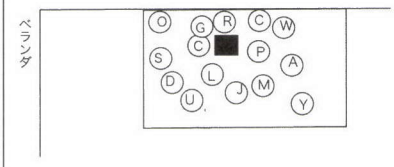
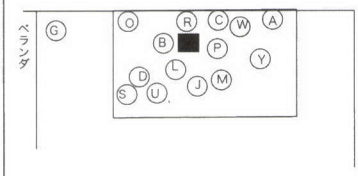
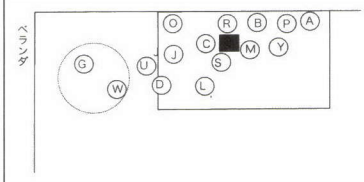
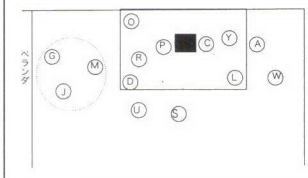
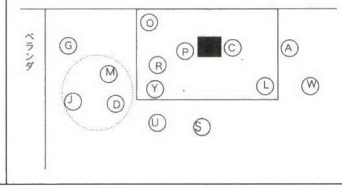
しかし、Tのふるまいは、BBごっこと無関係では決してない。遊びをノリ の視点から見るとき、Tのふるまいは、BBごっこに間接的に関与していると言うことができる。というのは、場面dで、BBごっこが盛り上がって一段落した後、BBコーナーにいたメンバーがブロックコーナーへ行ってBBを改良し始めるのは、Tの動きに関係していると考えられるからである。本章ではそのことを論じよう。

（1）遊びをとらえるノリの視点

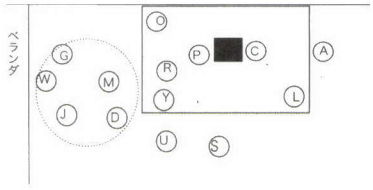
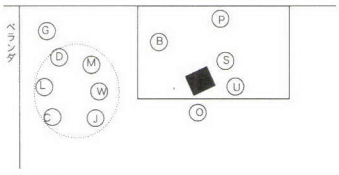
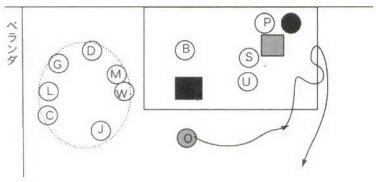
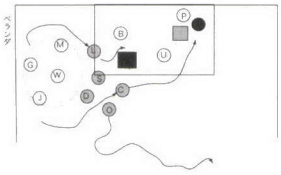
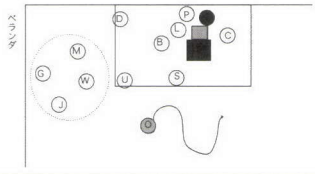
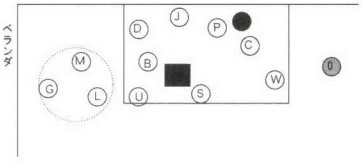
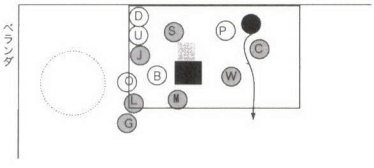
筆者は、これまで子どもが集団で展開する遊びをノリの視点から論じてきた。子どもが集団で遊びを展開することは、子どもが遊びのノリにノリ

表1　全体事例　　自由遊びが開始して間もなくの頃の保育室の様子。
製作、ブロック、BB、基地、ままごとの5つの遊びがずっと（約50分間）続いた。



場面		時刻	BBコーナーと ブロックコーナーの見取り図	BBコーナー
a		10:27		
		10:30		G男がBBを組み立てる（1）。
b		10:33		W男が作りかけのBBを持って来て、G男と一緒に相互に手伝い合いながらBBを組み立てる。（2）　できあがると、各々回しては、ブロックコーナーに戻り、BBを補強したり、作り直したりしている（3）（4）。
c	イ	10:54		W男とG男がブロックコーナーとBBコーナーを行ったり来たりしてBBを改造している間に、J男とM男がBBコーナーに来て、G男と3人になり（W男はブロックコーナーにいる）、M男がかけ声を発して3人でBBを回してぶるけあうBBごっこを始める（5）（6）（7）（8）。
	ロ	10:55		D男が「車」を持ってきて、輪に入り面白そうに見ている（10）。

	ブロックコーナー	Tの動き
	14人（G男、S男、D男、U男、O男、B男、L男、J男、M男、P子、R男、C男、W男Y子、A子）が群がり、ブロックの入った箱からそれぞれブロックを出す。	製作コーナーに座って、何か作っている。製作コーナーにいる子どもたち（6人）と時々話しているが、基本的には手を止めない。ときどき、他のコーナーに視線を向けて遊びの様子を見ることはある。
	G男はできかけのBBとブロックを数個持ってすぐにBBコーナーへ行く	同上
	14人が近くの子と井戸端会議をしながら（黙々と作っている子もいる一方で喋ることに夢中な子もいる）、それぞれブロックを組み立て始めるア。	
	W男はBB、O男は機関銃、P子とC男はBBを作ることに集中している イ。R男・M男・L男は最初は車、後にBBを喋りながら作っている。U男・D男は車、J男はBBを作っているようだが、お喋りに夢中で手は止まっている ウ。Y子・A子はBB、R男は車を作っている。（ときどき、BBコーナーのメンバーが戻って来てブロックを探す）	

場面		時刻	BBコーナーと ブロックコーナーの見取り図	BBコーナー
c	ロ	10:56		W男が戻って来て、かけ声をかけてBBを回してぶつけ合う(11)。見ていたD男も車を手にしたままかけ声をかける(12)と、それに合わせてM男たちがBBを回す。回す合間に銘々ブロックコーナーと行き来する(13)。M男は、車を持って来て、BBにぶつけるふりをする(14)。 D男は、ブロックコーナーでBBを作って持って来て(15)、一緒に回してぶつけ合う(16)。 こうして5人(W男、M男、J男、G男、D男)の間で「かけ声の唱和—回してぶつける」が続いて少し盛り上がる(17)。
	ハ	10:59		ブロックコーナーでBBを作っていたC男と、最初は車を作っていたが途中からBBを作ったL男がBBを持って加わる(18)(19)。それぞれBBを回したり、その場で作り直したりする(20)。
	ニ	11:01		7人が円座になり、次々と交代にかけ声をかけ、3、4人がそれに合わせて回してぶつけ合う。(21)～(25)そのうちに、「かけ声の唱和—回してぶつける」が続き、場が盛り上がる(26)。
d		11:03		盛り上がりが一段落すると、C男、D男、L男が続けてグロックコーナーに戻り、BBの改良を始める(27)(30)。 O男が機関銃を持ってやってきて、W男とG男のBBを「バーン」と撃つが、2人は全く取り合わない(28)。
		11:04		
		11:06		W男、J男ブロックコーナーに行き(31)(33)、入れ違いにL男が戻ってくる。G男、M男、L男の3人になり、M男がかけ声をかけ、3人でそれに合わせてBBを回す(34)。 L男はその後ブロックコーナーを片付けに行く
		11:09		

ブロックコーナー	Tの動き
C男、L男がBBコーナーに行く。	
A子、Y子、R男がブロックコーナーから抜けて他のコーナーに行く。ブロックコーナーは人数が少なくなり、閑散とする エ。シート上には、ブロックが散らばっている。	ブロックコーナーの方をときどき気にして見ている。
O男は、出来上がった機関銃を持って「バーン」と行って撃つふりをしながら歩き回る オ。S男とU男も、銘々ふらふらと歩き回り始める カ。 P子たちはブロックをいじってはいるが、ぼーっとすることも多く、作る集中力を欠いている キ。 ブロックコーナーが閑散としているのを見て、Tが入り ク、シート上に散らかったブロックを集めて箱に入れて場を片付け、ブロックで何かを作り始める ケ。	
Tはシートの上で何かを作っているケ。ときどき視線をあげずにP子と言葉を交わす コ。P子は作ることに集中し始めるか サ。 O男は銃を持ってふらふらと動き回り、BBコーナーに行ってBBを「撃つ」シ。S男、U男も「銃」や「車」を持ってをそれにつられるかのように、ふらふらと立ち歩く ス。	ブロックで何か作っている ケ。 ブロックコーナーに入る。
C男、S男、B男、U男、D男、L男が来て、シートの上に座り、C男はBB、S男とB男は機関銃、U男も機関銃、D男は、L男はBBを組み立て直し始める セ。 O男はウロウロと歩き回る。	同上
L男が、Bを持ってBBコーナーへ行く。W男、J男が来て、BBの改良を始める。	
M男がTに「何分まで?」と聞くと「もうそろそろ終わり」と言って、組み立てていたブロックをばらして箱に戻し始めて立ち上がると、P子たちもブロックをばらし始め、周囲の子どもたちが皆ブロックを箱に戻し始める	

ながら（遊びのノリを共有しながら）、新たなノリを共同に生み出すことであり（岩田 2005）、遊びを援助する保育者の役割は、そのノリの状態を読み取り、子どもたちが自分たちでノリを生成していけるように、保育者がノリを喚起する装置となること（あるいはそのことによって子どもたちのノリ生成を支えること）、そして、子どもたちが自分たちでノリを共同に生成できると判断したら、そこから撤退することであることを論じてきた（岩田 2009）。

このことは、子どもたちが共同にひとつの世界を生み出すようなごっこ遊びや歌や踊りなどの身体的パフォーマンスを共有する遊び（伝承遊びなど）だけでなく、一人ひとりが異なるモノを作るような製作の遊びについても言えることを、小川博久は指摘している（小川 2010）。例えば、製作コーナーに座って保育者がモノを作る活動に集中することは、保育者がモノとノリ（リズム）を生み出すことであり、そこに子どもたちが集まって来てそれぞれが同じ動きをすることは、子どもが保育者のノリにノルこと（ノリを共有すること）である。保育者の作る行為がノリを喚起する装置となり、子どもたちがそれにノルのである。もちろん、この場合、子どもたち銘々がそれぞれ何かを作っている場合、子どもたちのノリの共有度は、共同作業（歌や踊り、劇ごっこなど）に比べれば高くはない。けれども、銘々にせよ。同じような遊び行為によって同じようなノリ（リズム）を生み出しているので、緩やかながらもノリが共有されていると言うことができる。このように製作コーナーに座って「作るノリ」を生み出すことによって、その場（製作コーナー）はクラスの子どもたちの「磁場になる」（小川）のである。

（2）ノリの視点からの分析

BBごっことブロックコーナーの遊び場面、および、Tの動きを合わせた表1を、ノリの視点から見ると、そこには次の3つのノリがあると考えられる。

・「作る（―喋る）ノリ」

ひとつは、子どもたちがブロックコーナーのシートの上で展開するノリであり、手でブロックを扱うことによって生み出されるノリである。このノリを「作るノリ」と記すことにする。なお、製作コーナやブロックコーナーで手を動かして作る遊びは、多くの場合子ども同士の井戸端会議のようなお喋りを伴う。それゆえ、より正確には「作る（―喋る）ノリ」である。このノリは、製作コーナーやブロック遊びなどの作る遊びで生成されるノリであり、先述のように同じ行為をする子どもたちや子どもたちと保育者の間で緩やかに共有されていると言うことができる。事例の場合、このノリにノリながら子どもたちが作るのは、BB、「車（戦車のような車）」、「機関銃」、「ビル」である（表1、場面a下線ア）。

事例では、このノリからふたつのノリが派生する。ひとつは、BBごっこのノリであり、いまひとつはブロックで作った車や機関銃で戦いごっこをするノリである。次にそのふたつのノリについて述べよう。

・BBごっこのノリ―
「<作る―≪かけ声―回す≫>ノリ」

BBごっこは、BBをブロックで作り、それを回すタイミングを合わせるためにかけ声（「スリー、ツー、ワン、ゼロ。ゴ～～、シュッ！」のように）をかけて間を合わせて回し、他の誰かのBBとぶつけ合う遊びである。この遊びは、作っては回し、回しては作り、また、回してぶつけ合っては改良する、というように、回すこと及び回してぶつけ合う行為は作る行為を基調としている。この意味で、BBごっこの遊びは作る行為と不分離である。それゆえ、BBごっこのメンバーはその場でBBを作り直すだけでなく、しばしばブロックコーナーに戻ってブロックを補充して作る（部分事例及び表1の下線（3）（4）（6）（15）（30）（31）（32））。ブロックコーナーはBBごっこの「ベー

スキャンプ」なのである。このように、BBごっこのノリは「作る（―喋る）ノリ」を基調として、かけ声をかけて回してぶつけ合う行為（かけ声―回す）によって成り立つので、「<作る―≪かけ声―回す≫>ノリ」と記すことにしよう。

しかし、この「<作る―≪かけ声―回す≫>ノリ」は、多くの場合、最初からその全てがパフォーマンスとして現前するのではなく、現前するのはその一部である。BBが完成するまでの遊び始めの頃は、BBがある程度まで出来上がると試しに回し、その様子を見てまた作る、というように、作っては回し、回しては作る、ということを繰り返す（ぶつけ合うことはまだ行わない。例えば場面bのG男とW男：下線（2））。つまり、パフォーマンスとして現前しているのは「作るノリ」であったり、「<作る―回す>ノリ」であったりするのであり、これらは「<作る―≪かけ声―回す≫>ノリ」の一部の側面のみが顕在化したものだと言える。この過程において、「<作る―≪かけ声―回す≫>ノリ」の中の未だ顕在化していない側面（例えば「<かけ声―回す>ノリ」など）は、潜在化しているのであり、その意味で遊び始めの頃のノリは、正確に記せば、前者は「作る（―<かけ声―回す>）ノリ」、後者は「<作る―（かけ声―）回す>ノリ」（小文字部分は潜在化していることを表す）なのである。これらの潜在化されている側面は、遊びが進行してくるにつれて次第に顕在化し、「作る（―<かけ声―回す>）ノリ」は「<作る―（かけ声―）回す>ノリ」あるいは「<作る―≪かけ声―回す≫>ノリ」としての様相を表すようになる。

・戦いごっこのノリ―

「<作る―≪オノマトペ―攻める≫>ノリ」

「作る（―喋る）ノリ」から派生するいまひとつのノリは、ブロックで作った車や機関銃で戦いごっこをするノリであり、「バーン」「ダダダダ」などの擬音・擬態語（オノマトペ）の発声を伴って他者の車や機関銃を攻めるノリである。このノリも、BBごっこのノリと同様に、作っては攻め、攻めては作る、というように、ブロックコーナーを「ベースキャンプ」とした「作るノリ」が基調となっており、「作るノリ」と不分離であるので、「<作る―≪オノマトペ―攻める≫>ノリ」と記すことにしよう。

さらに注目すべきことは、「作るノリ」から派生する以上の二つのノリは、本質的には同じだということである。なぜなら、BBごっこも戦いごっこも、ブロックで作った道具を相手と戦わせる遊びであり、表面的には一方はBB、もう一方は機関銃あるいは車というように異なっているが、相手に発声を伴って向かう、という構えは同じだからある。車や銃を作りながら、BBを作ったり、BBコーナーの場にBBも車も持って来たり、車をBBにぶつけたりする姿はその表れである（下線(14)など）。それゆえ、二つのノリは未分化である。

以上の3つのノリの関係を図化すると図10のようになる。

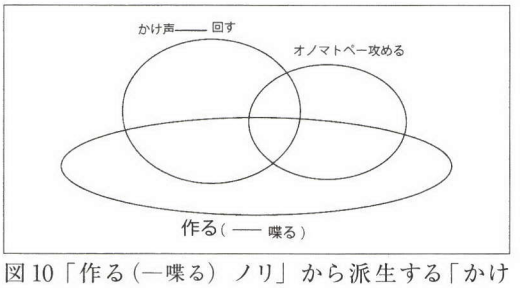


図10「作る（―喋る）ノリ」から派生する「かけ声―回す」ノリと「オノマトペ―攻める」ノリ

このように事例の遊びのノリをとらえるとき、事例の展開は、緩やかに共有されていた「作る（―喋る）ノリ」（場面a）からBBごっこのノリ（「<作る―（かけ声―）回す>ノリ」）が派生し（場面b）、続いて戦いごっこのノリ（「<作る―《オノマトペ―攻める》>ノリ」）が派生し、前者（BBごっ

このノリ）は活性化して「<作る—≪かけ声—回す≫>ノリ」となるが、その一方で、後者（戦いごっこのノリ）は拡散し、ブロックコーナーの「作る（—喋る）ノリ」も低調になった（場面c）ところに、Tが子どもたちの間に「作るノリ」を喚起することによって「作るノリ」が活性化し、その結果、BBごっこのノリがやや衰退する（場面d）、と解釈することができる（下記）。

場面a：「作る（—喋る）ノリ」（ブロック遊び）が緩やかに共有される
場面b：「<作る—（かけ声—）回す>ノリ」（BBごっこのノリ）が派生する
場面c：BBごっこのノリ活性化して「<作る—≪かけ声—回す≫>ノリ」が現前する一方で、「作る（—喋る）ノリ」は低迷する
場面d：Tの介入によって「作るノリ」が喚起される

以下、場面ごとに詳述する。

場面a：「作る（—喋る）ノリ」の緩やかな共有（図11）

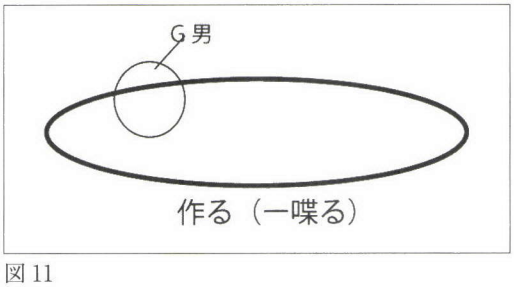


図11

場面aでは、14人の子どもたちが口と手を動かし、「作る(—喋る)ノリ」を生成している(表1下線ア)。子どもによっては、黙々と作ったり、作るよりも喋ることに夢中になる（下線ア）など、「作る（—喋る）ノリ」の一側面しか共有していない子どももいる。この意味で、ノリの共有のされ方は緩やかだと言えるだろう。

G男は、未完成のBBを持ってブロックコーナーからBBコーナーに行き、そこで「作るノリ」を生成している（下線1）。このG男の状態は、「作るノリ」からBBごっこのノリが分化しつつある状態であり、そこには「<かけ声—回す>ノリ」が潜在している。それゆえ、正確に記すならば「作る（—<かけ声—回す>）ノリ」（前述）である。

場面b：「<作る—（かけ声—）回す>ノリ」（BBごっこのノリ）の派生（図12）

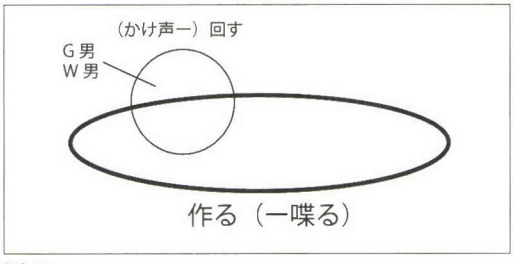


図12

G男の「作るノリ」（正確には「作る（—《かけ声—回す》）ノリ」）に、W男がノリ、その後2人のノリはBBごっこのノリの様相を呈し始め、「<作る—回す>ノリ」となる（下線（2））。「<作る（—《かけ声—回す》>）ノリ」のうち、「回すノリ」の側面が顕在化し始め、「<作る—（かけ声—）回す>>ノリ」となるのである。このノリは、ブロックコーナーの「作る（—喋る）ノリ」を基調としているので（先述）、W男とG男はブロックコーナーとBBコーナーを行き来している（下線（3）(4)）。そのことは、これ以降このノリを共有する子どもたちが、皆、ブロックコーナーに戻って作る（下線(5)(15)(18)(27)(30)(33)）のも同様である。

一方、ブロックコーナーでは、場面aと同様に「作る（—喋る）ノリ」が生成されているが、「作るノリ」と「喋るノリ」という「作る（—喋る）ノリ」の一部

のみが活性化する様子も見られる(表1下線イ、ウ)。

場面c：BBごっこのノリ活性化して「<作る―≪かけ声―回す≫>ノリ」が現前する一方で、「作る(―喋る)ノリ」は低迷する(図13)

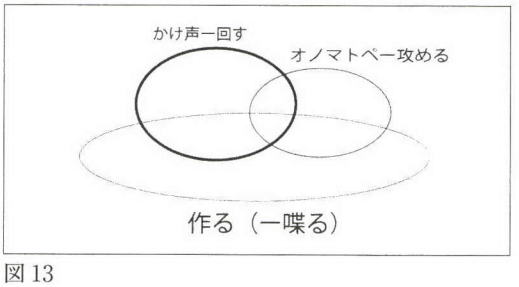


図13

W男とG男が「作るノリ」の生成に戻っている間(下線(5))、BBコーナーでは、J男が「<作る―回す>ノリ」を生成し始める(下線(6))。そこに戻って来たG男がJ男と「<作る―回す>ノリ」を共同に生成し始め、その後間もなくするとM男が来て、2人のノリにノリつつ、かけ声を発して、「<作る―≪かけ声―回す≫>ノリ」が共同に生成され始める(下線(8))。こうして、部分的な側面しか顕在化していなかったBBごっこのノリは、潜在化されていた側面が顕在化し、その本来の様相を呈し始める。

このBBごっこのノリの共有のされ方は、「作るノリ」と比較すると、その共有度は高い。というのは、「<作る―回す>ノリ」(BBごっこのノリ)は、単に銘々何かを作る動きの共有とは異なり、作るモノも、それを使った動きも同じであるために、多くの動きのリズムを共有しているからである。さらに、「<かけ声―回す>ノリ」は、かけ声によって互いの間を合わせ、動きを共有するので、ノリの共有度は「<作る―回す>ノリ」よりもさらに高くなる。それゆえ、この遊びは、「作るノリ」から「<作る―回す>ノリ」へ、そして「<作る―≪かけ声―回す≫>ノリ」へと、徐々にノリの共有度を高め、その高まりつつあるノリに、ブロックコーナーで「作るノリ」を生成している他の子どもたちがノッてくるのだと言えるだろう。「作るノリ」は、「<作る―≪かけ声―回す≫>ノリ」への展開可能性を胚胎しており(「<作る―≪かけ声―回す≫>ノリ」は「作るノリ」と未分化である(先述))、G男とJ男の身体上に「<作る―≪かけ声―回す≫>ノリ」が現前化することによって、それが「作るノリ」を生成している他のメンバーの身体にも胚胎されているこのノリへの方向性を喚起するのである。車は作っていたが未だBBは作っていなかったD男が、BBごっこのノリにノッてくる様子はそのことを示しているだろう。最初のうち、D男は車を手にしており、BBごっこのノリの一側面(かけ声)のみにノルかに見える(車を手にしたまま、かけ声をかける：下線(11))。しかし、その後のD男の様子は、D男がかけ声のみにノッたのではないことを示している。D男は、その後BBを作り、BBごっこに本格的に参入するからである。つまり、車を手にしてかけ声のみ参加していた時点のD男は、「<作る―≪かけ声―回す≫>ノリ」に潜在的にノッており(面白そうに見ている：下線(10))、かけ声を発するのは、そのノリの一側面の顕在化に他ならない。D男の身体には、このノリが潜在しているからこそ、D男はその後そのノリ(「<作る―≪かけ声―回す≫>ノリ」)を顕在化させてBBを作り(下線(15))、BBごっこに本格的に参加するのである(下線(16))。U男たちとともに車を作っていたD男が「<作る―≪かけ声―回す≫>ノリ」に潜在的にノルのは、車を「作るノリ」が、「<作る―≪かけ声―回す≫>ノリ」への方向性を胚胎しているからである。

こうしてノリが活性化し、それにノル子どもが増えることにより、ノリはいっそう活性化してその共有度を高め、「<作る―≪かけ声―回す≫>ノリ」における「作るノリ」は一時的に遅延され、共有度の高

い「≪かけ声—回す≫ノリ」が展開される(下線(17))。

この「≪かけ声—回す≫ノリ」が一段落すると、C男とL男がノリ生成のメンバーとして加わり(下線(18)(19))、遅延されていた「作るノリ」が顕在化し(下線(20))、再び「<作る—≪かけ声—回す≫>ノリ」が生成され(下線(25))、「≪かけ声—回す≫ノリ」へとノリの共有度が高まる(下線(26))。

一方、この間、ブロックコーナーでは、「作るノリ」にノッていたO男とS男、U男が、戦いごっこのノリ(「<作る—≪オノマトペ—攻める≫>ノリ」)を生成させる(表1下線オ、カ)。しかし、このノリは共有度が高まらず(銘々ふらふらと動き回る:表1下線カ、ス)、また、P子の「作るノリ」も低調である(下線キ)。

ブロックコーナーの「作るノリ」が低迷していることを読み取ったTは、ブロックコーナーで製作コーナーと同様の「作るノリ」を生成し始める(下線ク)。すると間もなく、隣のP子が「作るノリ」にノッてくる(表1下線サ)。

場面d:Tの介入によって「作るノリ」が喚起される(図14)

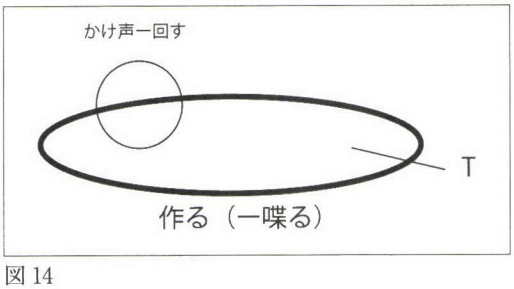


図14

一旦盛り上がったBBごっこのノリ(「<作る—≪かけ声—回す≫>ノリ」)が一段落し、それぞれがその場で「<作る—回す>ノリ」を生成し始める。そのメンバーのC男、J男、D男、L男(その後しばらくしてBBコーナーに戻ってくる)、W男がブロックコーナーに戻り「作るノリ」の生成へ回帰する(下線(27)(29)(30)(32)(33)セ)のは、Tの生み出す「作るノリ」にノルからである。先述のように「<作る—回す>ノリ」は、「作るノリ」と未分化であり、また　ブロックコーナーで「作るノリ」は、BBごっこのノリを生成する前に彼らが生成していたものであり、そのノリは身体に蓄積されているがゆえに、その蓄積されたノリがTの「作るノリ」によって喚起されるのである。

このとき、U男、O男、S男は「<作る—攻める>ノリ」を生成しているが、それは、決してノッているというものではなく(ふらふらと動き回っており、攻める役になりきっているわけではない:表1下線シ、ス)、ノリは低調である。それゆえに、共有度も低く、拡散している。しかし、Tが「作るノリ」を生成し始めて間もなくすると、「攻めるノリ」の低調だったU男とS男は、Tの生み出すノリにノル(シートの上に腰を下ろして、自分の車や銃を作り直し始める:表1下線セ)。

こうしてBBごっこの「<作る—回す>ノリ」は、半分以上のメンバーが「作るノリ」へと回帰するためにメンバー数が少なくなるが、G男(最初からBBごっこのノリを生成していた)とM男(「<かけ声—回す>ノリ」を先導していた)が「作る—≪かけ声—回す≫ノリ」を生成し続ける(下線(35))。その後、片付ける時間となる。

(3) 遊びに(直接関与していないように見えても)間接的に関与している保育者

以上の分析をもとに考えるなら、事例のTの行動は、BBごっこ遊びの状況と無関係なふるまいでは決してない。Tの行動は、視覚的には子どもたちの多様な動きとは無関係に見えるけれども、子どもたちの遊びの展開における人間関係や動きをノリという概念で読み解くとき、Tの「作る」営みによって生み出されるノリが、BBごっこ遊びの動きと連動していることが了解されるからである。

Tがブロックコーナーの「作るノリ」が低迷し

ているときに、そこに介入し、ブロックコーナーで「作る」動きをすることは、その動きによって「作るノリ」を生み出し、子どもたちの中に、現象としては希薄になっている「作るノリ」を喚起することである。遊びの開始当初、ブロックコーナーで「作る（―喋る）ノリ」を生み出しながら、そのノリを身体に蓄積させ、それとは未分化な新たなノリを生成していたけれども、そのノリが一段落したり（BBごっこ）、低調になっていた（戦いごっこ）状態にある子どもたちの身体は、Tの生み出す「作るノリ」によって身体に蓄積されていた「作るノリ」を喚起し、「作るノリ」を共有し始める。

言い換えれば、Tの行為は、BBごっこや戦いごっこのメンバーにとっての「ベースキャンプ」であるブロックコーナーがその本来の性質を発揮できていない状態にあって、再度ブロックコーナーの「ベースキャンプ」性を再生させる行為である。場面cで、ブロックコーナーの「作るノリ」が低迷しているとき、「ベースキャンプ」性は発揮されていない。ブロックコーナーが「ベースキャンプ」としての性質を保持するには、「作るノリ」がある程度活性化していなければならないのである。Tが「作るノリ」を生み出すことによって、ブロックコーナーは「ベースキャンプ」として再生されたのである。Tがブロックコーナーに入るとブロックコーナーの人数が次第に増えるのはその結果であり、それによって、BBごっこは人数が少なくなるのである。

そうだとすれば、部分事例として示したBBごっこの場面は、決して自己完結的ではないし、保育者の動きからも自立的ではない。BBごっこは保育者の動きと連動しているのである。それゆえ、事例のBBごっこの遊びをエスノグラフィー研究の対象とする場合、部分事例として記したようにその場面のみを切り取って記録し、フィールドデータとすることは、適切ではない。本発表で取り上げたBBごっこの場面をエスノグラフィー研究の対象とするのであれば、少なくとも、まず、担任保育者の動きはフィールドデータとして必須である。

Ⅳ おわりに

本稿では、保育実践における子どもの遊びをエスノグラフィーによって研究する場合、ある特定の時空間に展開される子どもの遊びにおける遊び行為（発話や動き）のみをフィールドデータとして記述することには問題があること、そして、子どもの遊び行為は外見上は自立的に展開しているように見えても、保育者の動きと連動していることを、BBごっこの事例を通して明らかにした。保育実践研究としての遊びのエスノグラフィーにおいて「フィールド」とは、保育実践そのものであり、それゆえ保育者の動きはその中核となるのである。

保育者が入ることによってその遊び場が他の遊びにとっての「ベースキャンプ」となるような関係性は、本稿で扱ったブロックコーナーとBBごっこのように、ある特定の遊びから他の遊びが派生する（ブロックコーナーの遊びからBBごっこが分化する）場合に限るものではない。製作コーナーで作ったモノをままごとや基地ごっこで使って遊ぶような場合は、製作コーナーがままごとや基地ごっこの「ベースキャンプ」となる。また、ノリの視点から考えれば、クラスの子どもたちの関係性がノリの共有によって築かれている場合は、ある遊びの中のメンバー間がノリを共有するだけでなく、遊び相互もノリの緩やかな共有によって影響し合うので、ある遊びの状況が他の遊びの状況と関連することになる。このことは各コーナーの環境設定が「見る―見られる」という関係に設置されることが重要な条件となる 。このように保育室の中の遊びは、空間的な関係性によって規定されるのである。それと同時に、歴史性にも規定される。これらの点については、稿を新たにして論じたい。

註）

1）「ノリ」の概念については岩田遵子（2005）を参照のこと。なお、筆者は「ノリ」概念を用いて、読み聞かせの場における子ども集団の反応や子どもの遊びについて分析・考察を行ってきている。岩田（2007）、小川・岩田（2009）など。

2）小川・岩田（2009）および小川博久（2010）を参照。なお、歌や踊りのように身体的パフォーマンスがリズミカルなものとして捉えやすいものとは異なり、黙々と作るという行為もノリが共有されているということは、次のように説明できる。並行遊びは、1人遊びのように思われがちだが、そうではなく、他の子どもがいなくなってしまうと子どもは遊びへ興味を失ってしまう。このことは、並行遊びは決して1人で遊んでいるのではないことを示している。そこに子ども間でノリ（雰囲気）が共有されているからこそ、遊びへの興味を持続させることができる。

3）作るモノが異なれば動きのリズムは銘々異なることになるので、同じモノを作る場合に比べるとノリの共有度は低くなる。

4）遊びの各コーナーが「見る―見られる」関係に設置されることの重要性は小川博久が以前から指摘している。小川博久（2000）等を参照。

引用文献）

岩田遵子『現代社会における「子ども文化」生成の可能性―ノリを媒介とするコミュニケーションを通して』風間書房、2005

岩田遵子「『幼児理解』の観念性を問い直す―保育者は子どもの生み出すノリによる『子ども文化』とどう向き合うか―」関東教育学会紀要第34号、2007、13頁～25頁、

岩田遵子「遊びが規範形成に及ぼす意義―伝承遊びの構造と事例の分析を通して―」、小川博久・岩田遵子『子どもの「居場所」を求めて―子ども集団の連帯性と規範形成』ななみ書房、2009、229頁～260頁

小川博久『保育援助論』生活ジャーナル社、2000

小川博久「幼児の『内的秩序』感覚の形成と『居場所』性」、小川・岩田前掲書、120～135頁

小川博久『遊び保育論』崩文書林、2010

無藤隆・倉持清美『保育実践のフィールド心理学』北大路書房、2009

鷲田清一『じぶん・この不思議な存在』講談社、1996